

### 多言語による高校進学ガイダンスへの振り返りと期待

佐野市立佐野小学校日本語教室指導助手 原田 真理子

日本国内の高等学校への進学率がほぼ100パーセントという現代に、外国につながる生徒という括りで進学率を見た場合、それよりはるかに低いであろうという事実。日本人生徒同様、「高校生になりたい!」という思いにあふれている彼らに対し、どのような厳しい現実が立ちまわっているのでしょうか。

来日して間もない生徒たちは、その多くが日本語という大きな言語の壁に阻まれ、高校進学をあきらめてしまいます。日本に長く生活している生徒であっても、ほとんどの家庭は、中学校卒業後の進路に関心を持ちつつも、その情報が得られる機会が少なく、進路の決定に際して親は子どもを介して得られる情報に基づき、子ども本人の意思に任せる傾向が多く見られました。本人が進路を決める場合、学校の先生のアドバイスであるとか、仲のいい友達が進学したいという学校だから自分も受けてみようとか、どこか他人任せであって本当に行きたい高校を自ら選んで進学しているようには見えませんでした。その結果、せっかく入学を果たしたのに途中でドロップアウトして退学してしまう生徒も多数いました。また、一部の保護者は、単願・併願といった日本特有の高校の入試制度そのもののしくみが理解できていませんでした。その上、入試にかかる費用、入学後の学費などの情報も不十分でした。そのため、試験には合格したものの、入学手続きの段階になって急に保護者が難色を示し、入学を断念せざるを得ないケースまで出てくるありさまでした。

この子たちや保護者がもう少し日本の学校制度や受験のしくみを理解していれば、志望校の特色を理解し納得した上で進学していれば、違った未来を描くことができたかもしれない。必要としている情報を必要としている人たちにどのように伝えたらよいのか…。そんなことがHANDSのメンバーの間で議論されるようになりました。初年度のコーディネーターだった矢部さんが、東京でのガイダンスを見学しに行き、触発されて戻って来て、ガイダンスの必要性を強く主張したことで、実質的な議論が始まりました。外国につながる子どもの進学問題に着目した我々は、地元栃木県において「進学ガイダンスがなぜ重要なのか」「なぜ開催する必要があるのか」を考えることから始まりました。

当初は生徒の通う地域で開催するのが最良の方法であると考え、佐野市や小山市で始まった進学ガイダンスにHANDSが資料作成や通訳などで協力する形をとって

いたものの、次第に全県的な規模でガイダンスを開催する考えにシフトしていきました。そうすることで、各地に散らばっている外国人生徒とその保護者の情報交換、ネットワークが構築されることが期待できるのではないかと、また、ガイダンスに携わる関係者のみならず、学校関係者、一般市民が現状を認識する機会になることが期待されるのではないかと考えたからです。そこで、栃木県国際交流協会や宇都宮市国際交流協会、宇都宮市教育委員会、小中学校の現場の教員と大学の関係者で開催のための意見交換会を開き、実施に向けての具体的な進め方について議論を重ねました。とりあえず何らかの手掛かりを得るため、すでに進学ガイダンスを行っている先進地域の視察を行い、実施形態や資料の活用方法などのノウハウを調べ上げ、栃木県という地域の特性を考慮しつつ準備を始めました。開催時期は、栃木県内の県立高校・私立高校の入試要項が確定する秋に決まりました。

まず準備に取り掛かったのは資料の作成です。資料の作成・翻訳に要する時間を逆算し、夏ごろから準備に取り掛かりました。高校入学試験に関する基本情報を資料に盛り込む際に、中学校の進路指導を実際に行っている先生からの情報や助言を得ることができ、できあがった資料の翻訳や当日の通訳の人材の確保では国際交流協会の協力を得ることができ、当日の会場準備は学生ボランティアによる協力が得られる運びとなりました。

次に、どのようにガイダンス開催を周知するのかが議論されました。県教育委員会の協力を得て学校現場に開催の実施要項を説明し、該当する生徒への案内と出欠確認を依頼しました。

こうして大学・各教育行政機関・国際交流協会などと協働で2010年10月24日に本学学生会館多目的ホールにて「第1回多言語による進学ガイダンス」の開催にこぎつけることができました。生徒・保護者の母語による説明会ということで、当時在籍数の多かったポルトガル語、スペイン語、タイ語、中国語、フィリピン語、英語の計6か国語で実施しました。

私は、主にガイダンスの資料作りと翻訳・通訳に携わってきたので、そのことを中心に振り返ってみることにします。資料の作成にあたっては、どのような形式でどのような説明をしたらよいのか試行錯誤するところから始まりました。それほど、ガイダンスの開催は前例の少ない未知の取り組みでした。とりあえず、基本的な情報を整理して資料に盛り込むことを考え、日本の教育制度、高校の種類、学科の種類とその特色、入学時・入学後にかかる費用、志望校の出願の仕方、試験の受け方、試験日程の確認のた

めのスケジュール表、県内の県立高校を記した地図などの項目が整い、ようやく資料の完成をみました。

この資料の内容を熟知した上で翻訳や通訳をしなければならなかったので、大学の外国人留学生や国際交流協会に働く外国人職員など、日本の学校現場をよく知らない人たちに翻訳や通訳をお願いする際には、事前に「三者面談」「単願・併願」「一般選抜・特色選抜」など、特有の単語の意味の説明や確認が必要でした。数回の打ち合わせを経て資料を読み解くうちに、通訳者にも徐々に高校進学の大変さが伝わり、本番の通訳に実感を込めることができた

思います。

ガイダンスは3部構成で、第1部では、言語ごとにテーブルを設け、通訳者が母語で高校進学に関することについて資料を使って説明しました。第2部では、第1部の説明時に参加者から出た質問に学校教育関係者が答える全体の質疑応答を行いました。各テーブルからの質問を通訳者が日本語に訳し、その質問に関係者が回答し、通訳者が参加者に母語に訳して説明をしました。時折、学校教育関係者でも即答できない内容の質問が出ました。また、アドバイスのことを求められることもありました。正確な情報

表1 多言語による高校進学ガイダンス開催状況

日 時	会 場	備 考
2010年 10月24日	宇都宮大学	参加生徒児童数30人、保護者・同行者数60人
2011年 10月23日	宇都宮大学	参加児童生徒数17人、保護者・同行者数31人
2011年 11月13日	真岡市公民館二宮分館	参加家族数16家族
2012年 10月28日	宇都宮大学	参加生徒児童数22人、保護者・同行者数42人
2012年 11月 4日	真岡市公民館二宮分館	参加児童生徒数18人、保護者・同行者数19人
2012年 12月 2日	大田原市役所湯津上庁舎	参加家族数8家族
2012年 12月 8日	小山市東出張所	参加家族数9家族
2013年 9月13日	那須塩原市西那須野庁舎	参加家族数12家族
2013年 10月 5日	栃木市公民館	参加家族数17家族
2013年 10月27日	宇都宮大学	参加児童生徒数22人、保護者・同行者数47人
2014年 9月26日	大田原市	参加家族数6家族
2014年 10月 4日	栃木市役所	参加家族数10家族
2014年 10月11日	真岡市公民館二宮分館	参加家族数20家族
2014年 10月26日	宇都宮大学	参加児童生徒数11人、保護者・同行者19人
2015年 9月11日	TOKOTOKO おおたわら	参加家族数9家族
2015年 10月 3日	栃木市役所	参加家族数8家族
2015年 10月18日	真岡市公民館二宮分館	参加家族数6家族
2015年 10月25日	宇都宮大学	参加児童生徒数11人、保護者・同行者数22人
2016年 10月 1日	栃木市役所	参加家族数4家族
2016年 10月22日	宇都宮大学	参加児童生徒数22人、保護者・同行者数32人
2017年 9月23日	TOKOTOKO おおたわら	参加家族数2家族
2017年 9月30日	栃木市役所	参加家族数5家族
2017年 10月29日	宇都宮大学	参加家族数20家族
2018年 9月17日	マロニエプラザ	参加児童生徒数10人
2018年 10月13日	栃木市役所	参加児童生徒数17人
2018年 10月20日	宇都宮大学	参加児童生徒数12人
2019年 9月16日	マロニエプラザ	参加児童生徒数16人
2019年 9月23日	栃木文化会館	参加指導生徒数16人
2019年 10月12日	栃木市役所	参加予定児童生徒数18人（台風で中止）

を分かりやすく伝えることと、適切なアドバイスを行うことは、簡単ではないですし、通訳にしても第2部と第3部では同時通訳が求められ、主催者側の力量が問われる時間でもありました。第3部は、卒業生による体験談の発表でした。

ガイダンスが終わった時点で、参加者にアンケート記入をお願いしましたが、そこに書かれていたコメントには多くの感謝の言葉や、ここへきてよかったという記述がありました。また、もっと多くの情報が欲しいという要望も同時に書かれていました。ガイダンスを実施して良かったという安堵感と、今よりもっとわかりやすいものへ工夫・改良を重ねていこうというモチベーションを高める機会にもなりました。

アンケートで有意義な時間が持てたという感想が数多く聞かれた理由として、次の要因があげられます。

一つ目は、卒業生の皆さんによる体験談の時間を設けたことです。体験談発表者は、外国人児童生徒として日本の小中学校で学び、国籍や母語や日本における滞在年数などは多様なバックグラウンドを持つ、日本で高校進学を経験した現役の高校生に加え、大学への進学をも果たした学生または社会人でした。発表の内容は、高校入試についての成功談もあれば失敗談もあり、また日本での生活や学校生活などでの苦労話もありました。この「先輩」たちの口から語られる真実は、良きロールモデルとして参加した生徒や保護者の心を大きく動かし、受験に立ち向かう勇氣と希望を与えました。

二つ目は個々の疑問に答えるため質疑応答の時間を設けたことです。担当してくださったのは、教育委員会の先生をはじめ県内の小中学校の日本語教室を担当されている先生や、中学校の進路指導を担当されている先生、高校の先生です。それぞれの立場で、的確な助言をしてくださったことに参加者は不安な気持ちを払拭できたことでしょう。

こうして、進学ガイダンスに参加して得た情報が、生徒の在籍する学校での進路相談に役立ち、無事に志望する高校への進学を果たすことができた生徒が徐々に増えていきました。大学での進学ガイダンスが軌道に乗り、また要望のあった市町のガイダンス実施にも協力する体制が整い、回数を重ねる度に参加者の出身言語が増えていき、資料は現在8か国語に翻訳されています。

表1は、2010年度から2019年度までのガイダンス開催状況を示しています。2010年度は、本学で1回開催、2011年度には、本学での開催の他、外国人児童生徒が多く学ぶ地域での開催を計画し、真岡市において開催しまし

た。2012年度には、真岡市、大田原市、小山市において開催しました。以降、各市教育委員会と共催する形で、継続的に地域でも開催してきました。2010年度から2019年度までの10年間で、HANDSはガイダンスを計28回開催しましたが、そのうち本学開催が9回、地域開催が16回、下野新聞社栃木県高等学校進学フェア会場での開催が3回です。

そして、実施回数を重ねるごとに課題もいくつか見えてきました。進学ガイダンスに参加することで情報不足という不安は解消されたとしても、進路を選択する課程において、学業成績が志望校を選ぶ判断材料となる現実は消えません。つまり、未だに公立高校の学力検査がこの子らにとってハードルの高いものとなっていることに変わりはないということです。なぜかという、外国にルーツを持つこの子どもたちの間でよく言われているように、生活言語と学習言語の習得には時間差があるので、たとえ長く日本で生活し、日本語が流ちょうに話せるようになったとしても、高校受験の時期を迎えるころまでに高校入試問題を突破できる学力を備えることは容易ではないのです。

外国人の定住化が進んだ現在では、日本に長期にわたって滞在する家族が大半を占めるようになりました。しかし、現行の高校入試における特別措置は滞日年数制限が本県の場合は3年と短く、多くの外国人児童生徒のニーズに対応しているとはいいきれません。高校入試に関しては、特別な配慮を今後も要望していくことを期待しつつ、小中学校の現場においてもこの子らの将来を見据えた学習計画を立て、日本語の早期習得に向けて指導方法を確立していく努力を惜しまないことを期待します。

また、高等学校という、義務教育の枠から外れたところで、外国にルーツを持つ、日本語の習得がまだ十分ではない生徒に対して特別な学習支援が施されることを期待するのは、容易なことではないのですが、近年彼らの母語を話す教員を配置し、支援の手を差し伸べている学校も出てきました。彼らの学びをこういった側面で支援していただけのは大変ありがたいことです。

子どもの成長と学びは、幼児教育、初等・中等・高等教育と個々に考えていくものではなく、ひとつのまとまった線上で構築されるべきで、外国にルーツを持つ子どもひとりひとりの学びもこういった長いスパンでとらえていく視点を養うべきと思うのです。

本学が全国に先立ち外国人入試を実施したことは、この考えに基づくものであると思います。力のある生徒がその実力を発揮する場所を途中で見失うことがないように、学びの機会を与えてくれています。

進学ガイダンスは、2018年度より本学開催に替えて下野新聞社主催の栃木県高等学進学フェアの会場で実施しています。こ2018年度に1回(宇都宮会場)、2019年度に2回(宇都宮会場と栃木会場)開催しました。本フェアの宇都宮会場では、主に県北と県央の高校が、栃木会場では主に県南の高校が数多く参加し、ブースを設けて各高校の情報提供やPRを行っています。このような一般の受験生や保護者が来訪し、多くの情報が得られる会場で、多言語による進学ガイダンスが開催できることの意義は大きいと思われます。メイン会場と異なる別室でガイダンスを行いますが、来訪者は必要に応じてメイン会場で様々な情報を得ることができます。フェアに参加する形でのガイダンスでは、従来行っていた全体説明会や体験談発表は実施せず、言語別のテーブルで時間をかけて情報提供と相談に乗る形を軸にしています。ガイダンスの開催時間も限られたものではなく、オープンにすることによって、開催時間に間に合わず遅刻してしまう参加者に対応できるようになり、また時間の許す限り、相手の話に耳を傾け、基本的な情報に加えてさらに多くの情報を伝えられるようになっています。高校進学に向き合う多くの高校生が集う雰囲気も、外国人生徒に大いなる刺激を与えていることでしょう。フェアに参加することによって、志望校の情報がよりよい形で得られるようになりました。

生徒や保護者のニーズに合ったガイダンスを開催しようとするなら、参加者の地域情報は、不可欠アイテムだと思います。私の住んでいる県南では、地域ごとのガイダンスが開催されています。大学主催のメリットを生かしながら、今後はさらに地域ごとの開催ができ、その地域ならではの情報を提供できるようなガイダンスがごく当たり前のように行われることを期待せずにはいられません。

### 『多言語による高校進学ガイダンス』10年を迎えて

真岡市立真岡東小学校教諭 佐藤 和之

2010年に宇都宮大学で始まった「多言語による高校進学ガイダンス」が昨年で10年を迎えました。「日本語を母語としない子どもたちと保護者に対して、日本の教育制度や高校受験に関する情報を正確に提供する」ことを目標に開催されて来ました。10年間で感じたことを書かせていただきます。

当初、日本の受験制度についての説明、そして新設された「総合学科」や「特色選抜」についての説明など、膨大な情報を時間内で懸命に説明しました。しかし、徐々に地域開催が多くなると、基本的な説明の他にその地域の情報

が求められるようになりました。費用についても概算ではなく具体的な金額を求められるようになりました。生徒と保護者には進学への関心が、開催当初に比べて徐々に高まりつつあると感じています。2018年から始まった下野新聞社主催の高校進学フェアに参加する形でのガイダンスでは、言語別ブースでの説明から個別相談と言う形になってきました。それに関連して、私たち運営側が提供する内容もより地域に応じたものであることが必要であると感ずるようになりました。将来就きたい職業には通学できる範囲でどの高校に進学する必要があるのかとか、うちの子にはどんな受験対策が必要かとか、子どもの日本語能力や学力ではどの高校に入れるのか、はたまたそれぞれの高校の大学進学率はどうかなど、日本の教育制度の概略から説明をしていた「ガイダンス開始当初」とは質問の質も随分変わってきたことに驚いています。

また、ガイダンスに参加したHANDSジュニア(宇都宮大学学部生)や県内の高校生は、身近な国際化の現状を目の当たりにする貴重な機会になったと思います。県内外の国際交流イベントに何度か参加したことがあるという彼らも、自分たちの周りに日本の高校に進学したいという気持ちを持ちながら、情報の欠如によりこんなに苦労している人たちがいることに気づく良い機会になったと思います。やる気や能力があるのに、日本語による学習が十分ではないということ、そして日本の教育制度を理解していないことにより、日本人の大部分の生徒が高校等に進学しているという状況で、進学できなかつたり自分の望む高校ではなかったことにより退学してしまったりしている状況が身近にあること、奨学金制度を知らないために進学を断念していることなど、親身になって情報を伝えてあげれば進路や将来が変わるかもしれないことを、参加した若者たちは実感したことと思います。そしてこれからの多文化共生の社会において、中心的な役割を果たしてくれるであろうことを期待したものでした。

現在、私は栃木県の小学校で外国人児童に日本語を教えています。一番の気持ちは6年生のパキスタン国籍Aさんです。彼はとても能力が高く母国語と現地語と英語の三つの言語の読み書きをマスターしています。しかし日本語は片言しか話せません。Aさんは日本で大学まで進学することを希望していますが、小学5年生の後期に編入学したため、栃木県の高校入試において帰国外国人特別措置は受けることができません。私の責務として、小学校卒業までに日本語会話と教科学習で使う日本語を身に付け